

## 歌が作れないときの覚え書き 佐佐木定綱

最近作歌がはかどらない。ぼくは何かがあったときに何首も一気呵成に作るタイプではなく、ノルマをこなすライン工のように、主立ったことが何もなくても毎日少しずつ溜めていくタイプなのだが、まあどうにもうまく出てこない。もつとも毎年三百六十日ぐらいうまく作れなくて苦しんでいるのでいつものことでもあるのだが。

はかどらない要因の一つとして、短歌を作るときのさまざまなしがらみがある。

読み手にどう受け止められるだろうか、修辞はあっているか、比喩は効いているか、具体を入れ込めるか、字余り、字足らずはあるか、言いたいことを言いすぎているか、驚きや共感はあるか、オノマトペはどうか、描写はできているか、平凡な言葉を安易に使用していないか、「て」「に」「を」「は」「が」「も」など助詞を置き換えてみてどうか、体言止めにするか、句の順序を入れ替えてみたかどうか、そもそもこの題材はどうか……。思春期かっつてぐらひ悩みのタネは尽きない。一度悩み出すと好きな子へ何を言っつていいのかわからなくなるように、一首をノートやエクセルデータに落とすことができない。シヨコラティエが「チヨコレートを作るのは恋と一緒にだ」と言っつていたが、歌を作るのもひとつの恋なのかもしれない。

うまい歌を作るなあと思ひながら雑誌をバラバラめくつていて、笑っつてしまふ歌に出会う。

・飽きることは絶対にない三十回ボールを投げて疲れたよ俺は

佐佐木幸綱「歌壇一月号」「少年テオの歌」

何度ボールを投げても終わることのない飼ひ犬との遊びに疲れた歌だ。歌意にはなんら含むところはなひ。ここまで正直に言われてしまふと笑うしかなひ。だつてこれ、ただの疲れたつていうだけの歌だ。

この笑ひは齋藤茂吉の歌を思ひ出す。

・人間は予感なしに病むことあり癒れば楽しなほらねばこまる  
人はいきなり病気になることがある、治れば良いけど治らなひと困るつて、そりやそうだ。何当たり前のこと言つてんだと思ひながらも、つい笑つてしまふ。

ぼくが頭を抱えて、くだくだとややこしく考へていたのはなんだつたのかと思ひるほど素直な歌だ。小学生の作品でありそうなほどの素直さだ。小学校の作文だつて「こまる」だけじゃなく「どう」こまるのかを書きなさい」と言われかねない。

それでもこれらは立派な一首である。ここにあるのは作者の真剣さだ。当たり前のものとして見過ごしていた世界に對する真剣な驚き。澁澤龍彦が「驚ひたり楽しんだりすることができるとも一つの能力であり、これには独特な技術が必要なのだ」と言つているように、素通りしてしまふような出来事を独特な技術で拾ひ歌ひ上げてゐる。

小難しく考へ出すと思考の袋小路に入つてしまふ。いろいろなもの置いておいて、驚き楽しむという歌の初心に戻つた。